



洗髪

夜に髪の毛を洗っています。

石鹸の泡は薫の後ろ髪を抜けて、背中へと滴っていきます。

すると薫は背中がによきによきと伸びていくような感じがして、気持ちが悪くなりました。

もちろん風呂場にいる薫は、少女の背丈のままに身体を洗っています。立ち上がったところで、湯気に濡れた天井との距離が変わるわけでもありません。

ですが、洗われている「薫」は刻一刻と大きくなっているのです。

石鹸をつけた手で髪の毛を撫でるにつれ、薫はだんだんと高くなり、天井にぶつかり、風呂場全体を満たしそうな恐ろしさを感じました。

そして徐々に身体を春闇に溶けこませながら、薫は恐ろしさの奥底に、密かな喜びをも感じていたのです。

夜店

目が覚めると、薫は列車に乗っていました。

あたりは真っ暗でした。時折踏み切りを通るときだけ、2、3秒線路の周りがぼおっと映し出されるのですが、それ以外はただ闇のなかを走っているのです。

少し過ぎると、薫は闇にも本当に黒い部分と、少し薄暗いだけの部分とがあることに気がつきました。薄暗い部分はざわざわ音がすることからすれば、たぶん、山なのでしょう。そして本当に暗い部分は、目を凝らしても何も見えないことからすれば、おそらく海なのです。

それに気がつくのと、列車は海沿いを走っていることが分かりました。海沿いを、トンネルを出たり入ったりしているのです。

そして幾たびかのトンネルを抜けると、国道の脇に店があかるく佇んでいるのが、薫の眼に飛び込んで来ました。

列車が通り過ぎたのは、ほんの僅かの間なのに、薫にはその店の造りから売っている品物まで、まるで手に取るようにくっきりと見えました。

店先にはみかんが売られ、店の中では細々とした日用品が置かれていました。田舎によくある何でも屋のようでしたが、人影はありませんでした。もっとも丸きり無人というわけではなく、店の奥には人の気配がありました。

店の周りには道路と、ポストのほか、何もありませんでした。道路の少し先はまあるく闇に消えこんで、上は黒い空で、後ろは色の違う黒い海がすぐそこまで迫っていました。まったくの闇のなかに、その店だけが浮かび上がっていたのです。

それを目にしたとたん、薫はなにかを思い出しました。忘れてはならないことだったのですが、流れていくうちに忘れてしまった、遠い約束です。でもそれが何の約束なのかは、一向に思い出せないのです。

すぐそこまで出掛かった記憶なのですが、薫はもどかしさをどうすることもできず、ただ列車の振動に身体を傾けるのでした。そしてそれまで遠かった海鳴りが、次第に大きくなって、列車ごと飲み込んでしまうのを感じていました。

街の灯

もう何時間たったのでしょうか。ただ外のエンジン音だけが聞こえる音でした。

薫は窓扉を開けて外を見ようとしたのですが、真っ暗で何も見えませんでした。

機内は八割くらい埋まっておりましたが、全員眠っており、灯りも話し声もありませんでした。ただ薫だけが暗いキャビンに取り残されていました。

喉が乾いた薫は、水を頼もうとしましてコールボタンを押したものの、誰も来ませんでした。不思議に思った薫は立ち上がると、機内を歩き回りましたが、やはり乗務員はどこにも見当たらないのです。

あきらめて薫は自分の座席に戻りましたが、そこには別の人が座っていました。薫はどくように頼もうとしてその人の顔を覗きましたが、暗くてはっきりしません。ですが眼が合うとその人は口を切りました。

「お母さん、ひさしぶりですね」

「・・・あたし、子供なんていないわよ」

「そんな悲しいこと、言わないでください。ぼくは百年前の息子じゃないですか」

そう言われると何だか薫はその気がして、遠い昔に、そんな子供を産んだことがある気がしました。

「ああ、そうだった・・・かしら」

「思い出してもらえてうれしいです。今日はお別れにまいりました」

「お別れ？」

「長らくお世話になりましたが、もう会うことはないでしょう」

そう聞かされると何だか悲しいような気がして、薫は窓に視線を移しました。

すると先程の真っ暗とはうって変わって、下には目ばゆいばかりの宝石が散乱しておりました。そこは確かに薫が百年前にこの子と過ごした街だったのです。

そしてこの飛行機はそこに向かって途中だったのです。飛行機は急降下して、いつか薫が子供をつれて歩いた川沿いの遊歩道迄見えました。でも街は思い出せても、なぜだか子供の顔も名前も甦っては来ないのです。

「ではさようなら」

「待って、あなた、どこに行くの？」

「いえ、ぼくはどこにも行きません。行くのはお母さん、あなたなのです」

とたんに薫は百年前の出来事を思い出しました。百年前、自分が息子を川に流したことを思い出したのです。あの凍てつく冬のよる、人目を憚りながら、薫はまだお腹のなかにいたこの子を流したのです。

「おお、おお」と薫は声にならない声を出しながら手で顔を覆いました。その向こうで子供は言いました。

「お母さん、その手でしたね、ぼくを胎内から引きずり出したのは」

「おお、おお」

「その指でしたね、ぼくと母さんを繋ぐ臍の緒を千切ったのは」

「おお、ああ」

「その掌でしたね、ぼくのまだかたちを成していない首をへし折ったのは」

「ああ、ああ」

すっかり思い出しました。薫は手に残るこの子の首の感触さえ、思い出しました。その外では街の灯りがいよいよ大きく、あやしく光を増していくのでした。

夜なのです。

薫は商店街のアーケードを歩いていました。お店はもうだいぶ閉まっていて、人通りもほとんどありません。

道には布団が持ち出されては、男どもが堂々と寝ていました。なかには寝ながら新聞を読んだり、ラーメンをすすったりしているのもあります。焚き火している輩までいます。

そしてその間をすすすと、業務用の自転車が器用にすり抜けていきます。自転車はとあるお店の正面に着くと、乗り手は店のなかに消えました。

見ていた薫は釣られてお店に入って行きました。

所狭しと置かれているのは、やかん、湯たんぽ、如雨露、針金などでした。

（ここは・・・金物屋だわ）

と薫は思いました。そして壁に掛けられた、銅製のジョッキを手に取りました。

ジョッキには一面に鑿（たがね）が打ち付けられた跡があり、薫はそれを指でなぞりながら、魚の鱗のようだわね、などと思っていました。

思っていると、お店の奥のほう騒がしくなりました。そこで薫はジョッキを元に戻して、奥に進みました。奥はガラス障子が張られており、その向こうから音がするのです。普通、そこはお店のプライベートエリアなので、薫は障子を開けるのをためらいました。

けれども音はますます大きくなるばかりで、（こんな騒音だもの、ひょっとしたらお店の人に何かあったのかも。障子を開けて確かめなくちゃ）と薫は自分に言い聞かせて、開けてみました。

するとそこは外なのです。しかも夜だったはずなのに太陽が出ていて、お昼なのです。明るい日の下で、法被を来た人たちがお神輿を担いで騒ぎ立てていました。

（お祭りだ、お祭りだ）

そう思うと、薫はすっかり楽しくなって、神輿に駆け寄りました。振り返ると先ほど障子がぼつんと見えて、蛍光灯が淡く点いているのが見えました。確かに薫はついさっきまでそこにいたはずなのですが、今こうして見てみると、それは何か遠い異国の出来事のように感じられました。

万国旗が縦横に張り巡らされた街路を、神輿が進んで行きます。金木犀の街路樹が、次々に過ぎていきます。どおんどおんと、花火のような音がします。

行列はますます盛んになり、薫は押し出されて神輿の前に出ました。そしてちらりと見ると、神輿の中に座っていたのは、紛れもない薫でした。その薫の手のひらの中には、あのジョッキが包まれていたのです。

その瞬間、薫はすべてを思い出しました。ですが何を思い出したかは思い出せませんでした。ただ迫り来る洪水のような雑踏のなかで、いよいよジョッキはにぶく光るばかりなのでした。

黒い塔

薫は路地を歩いていました。

あたりはすっかり日が暮れて、墨のような闇がたれこめていました。そして闇を透かして、ときどき小さな灯りがちかちか瞬くだけなのです。

その闇に照らし出されて、はるか頭上には巨大な塔が立っているのが見えました。あまりに大きすぎて、最初薫はそれが塔というより、巨人か化けものかのように思えたほどです。

塔は下が大きく膨らんでおり、半分ほど上に行ったところで急激に細くなり、あとは飴細工のように星に向かって引き伸ばされていました。

まわりは暗くてその全体像ははっきりとはしませんでした。塔のあるところだけは真っ暗で、薄明るい夜空から浮き上がっていたので、そうと薫には分かったのです。

薫は路地から路地へと伝い歩いていましたが、そのたびに塔の姿が見え隠れしていました。「廃院」と張り紙されたタイル張りの産婦人科を過ぎると、その窓ガラスに映っていましたし、コンクリート床に直接食卓を置いた大衆食堂の屋根の上にも、覗けていました。

そうして歩き続けましたが、塔は近くも遠くもならず、ずっと薫の背後に立ち続けているのです。

薫が見上げると、塔の上から1/3ほどのところで、赤いランプが点いているのが分かりました。ランプは一定のリズムで点滅を繰り返していましたが、それはクジラの鳴き声のように遠く響きました。

その海のようなリズムのなかで、塔はしだいに得体の知れない化けものに広がって行き、薫の背後に迫りました。

けれども薫はそれを怖いとも思わず、むしろ待ち望んでもいるように歩を早めるのでした。

陽は沈みつつありました。

頼まれもしないのに、薫はおつかいに出かけました。陽は沈みつつあるのです。

銀貨を振ったように星が光り出します。

その下で街灯がオレンジ色に灯ります。

その灯りに照らされると、薫はなにか悲しいような、浮き浮きするような気持ちになりました。

一匹のアゲハがひよろひよろと漂っています。街灯に照らされて、その影が淡く、白壁ににじんでいます。

そして耐えかねたかのように停まると、その鮮やかな肢体は小刻みに震えました。

つまみ上げると、その震えが薫にも伝わりました。蝶は闇の訪れを震えていました。薫はどこか遠くの森で、拙い本のページが開かれるのを感じていました。

黒い入り江では、幾万もの電飾がいっせいに点滅し始めました。嬉しいような、それでいて恐ろしいような気がしました。

そしてふと力を込めた瞬間、羽がもげて蝶は流れ去りました。掌には鱗粉と千切れた脚が、そこにいた生き物のなまめかしさを語っていました。

確かにそこにいたはずなのに、もうその感触さえ明らかではありません。ただその残骸だけが、うそのように生き物を象っていました。

おつかいはまだ終わっていません。

仮面の街

街灯の下の方で、4人ばかりの男どもが立っています。

薫がそばを通ると、それまででんでな方向を見ていた男どもは、一斉にこちらに顔を向けました。ですが、その頭には顔がなく、仮面が付けられていたのです。

薫はどきりとして、あたふたしながら、男どもの傍を通り抜けようと思いました。

仮面には眼も口もありませんでした。ですが薫は彼らが薫を穴があくほど見つめているのが分かりました。

男どもは話もしなければ身動きさえもしませんでした。それが却って薫の心臓を絞るのです。

一時間もかかったように感じられましたが、その実、ほんの数分のことには違いはないのです。

ようやく街灯を通り過ぎると、道は真っ暗になりました。というよりも、そもそもそこには道さえないので。ただ淡い闇が、どんよりした倉庫のように広がっているばかりなのでした。

そしてその闇の向こう側には、薫の顔を剥がしてずらそうとする悪寒ばかりが広がっているのです。

そこに至って、薫は自分が最涯の街に来たことを思い出したのです。自分の言葉も身体も通じなくなりつつある最涯の街に来たことを、はじめて思い出したのです。

宝玉浴

気がつくとき薫は沈み込んでいるのです。

深い宝玉のなかを、静かに、ですが確実に沈み込んでいるのです。

薫のスカートは上のほうにたなびき、髪の毛も上へ上へと伸ばされていきました。

髪の毛に絡めていたヘアピンも、すっかりほどけて流れて行きました。

なぜどうしてこの宝石を沈み込んでいるのか、薫には思い出せませんでした。

いつ沈み込んだのかもはっきりしません。ほんの5分前のような気がしますし、5日前のことのような気もしました。

石のなかは暖かで、遠い日暮れにおいて来た筆箱や、幼いころに譲り渡したままごとセットなどが、岩壁にしまいこまれていたりして、それを手に取っては戻しながら沈み落ちるので、そう退屈はしていないのです。

そして沈みこみつつ、ゆるやかに世界の中心に向かっていくことが、薫には確かに感じられたのです。

ですから最早行きつく先がどこなのか、自分は どうしてここに落ち込んだのか、もうどうでも良いことなのでした。

良いはずなのに、水がゆらぐたびに薫は震えるのです。そして誰かが語りかけてくるような、そんな切ないそよぎに瞳を奪われるのです。

地の虹

地下鉄の帰り道、薫はエスカレーターを降りていました。

下に下に降りていました。

とても長いエスカレーターで、先などかすんで見えません。

振り返ると乗ってきた入り口は幽かに見えてましたが、すぐにそれも見えなくなりました。

あんまり長いので、薫はスカートのすそを伸ばして鉄段に座りました。

まわりの壁には、最初は化粧品だのパチンコ屋だのの広告が鈍く光っていました。触ると指にはうっすらと埃が付いて、埃が取れた部分はきらきらと輝き始めるのですが、すぐに後ろの方へと流れてしまい、やがて剥き出しの煉瓦塀だけが延々と続くようになるのです。

さらに降りると灯りさえも途切れ途切れになり、薄ぼんやりした中を、薫はただただ流されていくのでした。

少し怖くなった薫は立ち上がってだんだんと降りてみるのですが、いつまで降りても同じ光景が続くので、やがてくたびれてまた座り込むのでした。

しばらくいくと、昇りエスカレーターの上に誰か乗っているのに気がつきました。最初はやけにのっぺりした顔の男だと思いましたが、近付いて来ると、それは目も口もない仮面をかぶった男でした。

薫は勇気を出して聞きました。

「あの・・・このエスカレーターはどこに行くんでしょう？」

男の口？からは、トロンボーンのような声が漏れました。それは人間の声というよりは、大きな獣の唸り声のようで、恐ろしいようで悲しいような、それでいていつまでも聴いていたいような声でしたが、すぐに昇りエスカレーターは男を連れて行ってしまいました。

しかしすぐにまた別の男が昇ってきて、やはり同じように薫に語りかけては去っていきました。

男の数は次第に増えてきて、じきに隣のエスカレーターは仮面をつけた男どもの、深く太い声

でいっぱいになりました。

気がつくと、その奇妙なコーラスのうえに、ありありと極彩色な虹が立ち上がっていました。

それは虹にしてはあまりに鮮やかで、地下の真っ暗闇に、王冠のようにそそり立っていました。

虹の光に薫はなぜだか不安になりました。そして指についた埃を取ろうと、いつまでもハンカチで指をこすり続けていたのです。

泣く女

道端で女のひとが泣いているのです。

ガードレールによりかかって、アスファルトの上にぺたんと座り込み、こどものように膝をかかえて泣きじゃくっているのです。

その足ははだしです。薄汚れた足裏です。

男のひとが彼女を引き上げようとしているのですが、そのたびに女のひとはいやいやしながら、地べたにへばりつくのです。

たまりかねた男は無理やり引きずって行こうとしますが、女はガードレールにしろい手足を絡ませて、懸命に泣きじゃくるのです。

そばを何台もの車が通り過ぎて行きます。熱い排気ガスがアスファルトにこぼれます。

そのガスのなかで、初夏の空気はぎりぎりまで引き伸ばされていきます。おののくような、切ない苦しみがながれます。恐ろしいほど暗い真昼です。

サルビア・キッス

そのまやかしのように紅い色に誘われて、薫はつい口をつけてみました。一瞬、サルビアの甘いような、みずみずしさが舌先を貫きました。どこかのプールで浮かび上がるように、遠い夏の記憶がよみがえります。

好奇心に駆られてキスをした、そのキスの甘さ。驚いた同級生の瞳と、その胸の震え。薫はひりつくような太陽の背丈を感じていました。その汗ばんだ素肌を抱きしめようとして、薫の手が触れたのは、サルビアでした。

房なりに生ったサルビアの淡い花を、薫の手はするりと抜けていったのです。そのとき、いつか置き忘れていた日々が、戻ってきました。偽りの虹が燃え尽きようとしています。その遠い日々を沈み込みながら、いつしか薫は石になりました。

石は甘いようでいて、よくよく噛んでみると、やはり苦いのです。吐き出した石の欠片には、紅い花弁が混じっていました。振りむけば、路なりに並んで咲いたサルビアの列だけなのです。そこにいたはずの薫は、もう影しか見えません。

汝に問う

あるよく晴れた朝、布団をしまおうと家の押入れを開けると、そこには父と母とが座っていました。父は黒い服を着て、母は白い服を着て、卓袱台を挟んで茶を飲んでいました。黙って飲んでいました。

その黒縁の眼鏡や丸めた背を見ると、たしかに父母なのですが、やはりどこかわざとらしくような、不自然なのです。肌なども青白く、生気がないのです。

たまりかねて薫は聞きました。「あなたがたは何者ですか？」

するとすっと二人は立ち上がりました。見ればそれは親でもなんでもなく、人間ですら、ありませんでした。青い藁で編んだ人形なのです。

二人の人形はその青白い顔だったものを薫に向けて、言いました。

「ではお前は何者なのか？」

「ではお前はなにものなの？」

すると押入れが倒れて一というより押入れのふりをしていた壁が倒れ、崩れ去ってしまい、建物の骨組みだけが、薫と人形だけを取り残して立っているのみなのです。

その骨組みの上に、卓袱台と人形と薫だけが、立ちつくしていました。そこを風がぴうぴう鳴らし、辺りは日が暮れているのか、あるいは曇天なのか、すっかり薄暗いのです。そのうす暗がりの中、薫は緑の瞳を思い出しました。闇の中に翡翠のように、エメラルドのようにつよく煌く、あの瞳を感じたのです。

「あたしは、あたしよ。あたしは、あたしなの」
そう言うと、薫は人形どもを後にして、建物を下りていきました。

その下は藁人形よりもずっと得体にしれない、黒い人形どもが渦を巻いていました。泣き出しそうになるのを堪えながら、それでも薫はあの瞳のまま、歩いていこうと思ったのです。

黒い灯台～薫の冒険～

<http://p.booklog.jp/book/38644>

著者：仲 薫

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/geltish/profile>

表紙画像：[Andrew Bossi](#) under

Dual-licensed under the GFDL and CC-By-SA-2.5, 2.0, and 1.0

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38644>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/38644>